

M資金伝説・再考

渡辺良智

〔キーワード〕 M 資金, 噂, 詐欺, 戦後史, GHQ, 埋蔵金伝説

〈要 約〉

占領軍が日本占領中に設けた秘密の巨額資金があつて密かに融資されているというM資金の噂について再検討した。M資金が実在するのか虚構なのかは、当事者以外メディアの報道でしか知りえないので、報道状況について検討した。M資金そのものについては存在するという報道はなく、存在しないという報道はあるが、メディアの報道は殆どがM資金詐欺事件についてであった。融資がなかったから詐欺になるが、M資金がないとは言えない。一方、M資金の実在を示唆する傍証はあるものの実在の証拠はない。結局、M資金はあるともないとも断定できなかった。つぎに、M資金詐欺について、なぜ繰り返し発生するか検討した。巨額融資詐欺をM資金詐欺と一括すること、M資金詐欺の巧妙さ、見返資金というM資金の原型と考えられる資金が実際にあったこと、M資金がないことが証明されていないこと、が理由と考えられた。また、21世紀に入ってもM資金に対する一般の関心が高い理由として、M資金話は埋蔵金伝説の一つではないかという仮説についても検討し、M資金は占領軍の埋蔵金と言えることがわかった。

1. はじめに

あるところに秘密の巨額資金があり、それは戦後日本の経済復興や政治工作のために用いられたという噂があり、その秘密資金の融資をめぐる詐欺事件がしばしば新聞や週刊誌などで報道されている。そこで、筆者は、これらのテーマについて調べ、その結果を「M資金伝説」として1998年に発表した。これで、このM資金の噂については一応区切りつけたと考えたし、既に第二次世界大戦終了後半世紀以上経た現在、今さら戦後史の闇とか謎と言われるM資金についてこれ以上調べてみても大して意義があるとは思わなかったので、その後の状況については調べていなかった。しかし、この種の詐欺は後を絶たず、M資金関連の雑誌記事や本も次々と出ている。また、たまたまインターネットで「M資金」と検索してみると、25万件以上ヒットし、M資金に対する一般的な関心は薄れていないと考えられた。さらに意外なことに、拙稿についても言及されていた。そこで、先の論文では取り上げることのできなかったM資金の側面に焦点をあてて、M資金の謎を少しでも解明できれば、なんらかの意義があると考えられる。今回は、新しい資料を加えて、前稿では検討しなかった側面を中心に、M資金伝説について

さらに検討してみたい。

2. M資金の噂

日本は、第二次世界大戦に敗れ、1945年9月、米軍を中心とする連合国軍に占領されその施政権下に置かれた。連合国最高司令官総司令部（GHQ）は、52年4月、サンフランシスコ講和条約が発効して日本が独立を回復するまでの占領期に、大戦中日本軍が略奪してきた大量の貴金属や終戦間際に隠匿された物資を接収したが、これらの他に、米国から日本へ提供された援助物資などを基にして、日本の保守政権維持や基幹産業振興のための極秘資金を設立し運営したと言われる。これがいわゆるM資金である。

敗戦直後主要工場の生産力を失った日本経済はどん底状態で、日本人はアメリカからの食糧援助で生存を維持したが、東西冷戦のさなか50年に勃発した朝鮮戦争の特需により日本の経済は復興し、日本は独立後さらに奇跡的な高度経済成長をとげ、アメリカに次ぐ世界第二位の経済大国となった。確かに、日本は、官民一体となって経済成長に力を入れ、「過労死」が問題となるほど日本人は勤勉に働き、エコノミック・アニマルと揶揄されたが、これだけでは日本の奇跡的な経済成長は説明がつかない。また、終戦後短期間に中小企業から大企業に成長した企業も多かった。占領時代の出来事が、何かしら関係があるのではないか。例えば、冷戦期に反共の砦としての日本を復興させ支持する目的で、アメリカからあるいは別のルートから日本の基幹産業育成のために巨額の資金が秘密裏に融資されたと考えれば、先の疑問も氷解する。この秘密資金が、アメリカ占領時代の闇資金に淵源するといわれるM資金である。M資金は、日本の基幹産業育成のため極秘に融資されていると言われるので融資に直接関与した当事者以外には実在するのかわからない。そこで、M資金をめぐる憶測や願望の入り混じった不確かな情報が出回ることになる。

ところで、事実に基づかない根拠のない情報は、噂と呼ばれるので、M資金に関する情報、M資金話は一つの噂である。噂は、ある事柄に関する十分な情報がなく曖昧な状況に置かれたときに生まれる。噂は、人々が曖昧な状況に置かれたときその状況について作り上げた解釈である。そして、噂は、ある話題の重要さと曖昧さの積に比例して流布するというG・オルポートとL・ポストマンの有名な公式がある。M資金の噂も、曖昧さと重要さという条件に叶うので、広まっている。

なお、前稿でM資金の噂を「伝説」としたのは次の理由による。噂には、親しい人々の間で特定の個人についておしゃべりするゴシップ、社会情報としての流言、情報の真偽よりも話自体を楽しむ都市伝説の3つがある。現在、このM資金の噂は、ほとんどがM資金詐欺の噂である。それは、「ある会社の経営者がM資金詐欺にあって何億円騙し取られた」というようなものなので、特定の個人についての噂であるゴシップとも考えられるが、親しい人々の間で交わされる噂というより社会情報である流言に近い。メディアもM資金詐欺をニュース＝社会情報として広く伝えている。また、都市伝説のばあいは、友だちの友だちから聞いた話で起承転結のような話の構造と教訓があり、繰り返し語られるものであり、前述の詐欺の噂だけでは都市伝説とは言えない。だが、流言は発生や流布は1回限りのものとされるがよく調べてみた

らほぼ同じ内容の噂が他の場所でも広まっていたということもあり、流言とされていたものが都市伝説と考えられるケースもある。例えば、東京ディズニーランドへ遊びに行った子どもが誘拐されるという流言は、同じ話の構造と内容をもつ都市伝説がアメリカから入ってきたと考えられる。M資金詐欺の噂もバリエーションはあるものの「ある会社の経営者がM資金詐欺にあって何億円騙し取られた」と、同じ構造の話が繰り返されているし、そんなうまい融資話はありませんから気をつけろという教訓も含まれているので、都市伝説に近いと言えるかもしれないが、友だちの友だちから聞いた話という語られ方はない。そこで、一般に信じられていたり、広まったりしている話＝伝説としておけば、都市伝説も含むと考えられたので、伝説としたのである。

3. M資金とは

本稿の最初に書いたように、M資金の噂には、本来のM資金話とそれから派生したM資金融資話の2つが存在する。まず、本来のM資金から検討してみよう。

GHQが設立し運営したと言われる秘密の巨額資金はM資金と呼ばれているが、そのMについては、GHQ経済科学局（ESS）2代目局長のW・マーカット少将に由来するという説が最も有力である。なぜなら、占領期、ESSは、日本の経済、産業、貿易、為替、労働、財政、税制、賠償などの分野を取り仕切り、財閥解体、労働組合の結成支援、経済復興、為替レートの設定など様々な問題に関与し、巨大な資金や利権を取り扱っていたからである。この他、GHQの最高司令官マッカーサー元帥、米の略語メリケンや54年に日米間に結ばれたMSA（相互防衛援助）協定、フリーメイソンのMとも言われる。また、吉田茂首相の関与が大きかったことから吉田資金とも呼ばれる。

M資金は、その呼称からESSのマーカット資金が主体のように考えられているが、資金規模からいえば、マーカット資金よりもG2（参謀2部）系資金の方が大きかった。ESSの資金工作の対象となったものは、調達庁の発注受納操作、見返資金回収工作、閉鎖機関の処理払い下げ、特種整理委員会関係、炭鉱関係、貿易管理関係、隠匿蔵物資処分、日発九分割問題、捕鯨船団問題、計画造船問題、軍需工場再開問題などに及んだというが、50年代初頭、マーカット資金の規模は300億円とも50億円とも言われていた。G2系にはウィロビー資金、メリケン・ファンドと言われた四谷資金、キーンラン資金（LS資金）があり、四谷資金だけで1,500億円を超すと言われた。M資金は日本の経済復興のための秘密資金というよりは、反共謀略工作資金という性格が強かったと考えられる。

50年6月に朝鮮戦争が勃発し韓国軍を支援するため日本占領中の連合国軍が戦地に派遣された。日本が防衛の空白地帯となったので、それを埋めるため、GHQの指令で自衛隊の前身である警察予備隊が設けられたが、憲法の制約があり日本には軍事予算がなかったためM資金から2兆円拠出されたという。日本が独立を回復するとともにM資金は日米共同の管理となり、さらに60年の安保改定とともに資金の管理権は日本に譲られ、岸、佐藤、田中、中曽根ら有力首相が引き継いだという。60年当時、12,3兆円あったM資金は、その後の運用の結果、

91年当時60兆円(500億ドル)までふくらんだとも言われる。一方、アメリカがケネディ政権からニクソン政権(61～73年)まで介入したベトナム戦争の膨大な戦費に支出して消尽した、日本の管理者が政治資金や公共事業に費消して消滅した、という説もある。M資金の存在が公的に確認されたことはないが、94年に公表された米国国務省文書によれば、米国CIAは50年代から60年代に自民党に数百万ドルという多額の資金援助を行っているが、その秘密資金がM資金から支出されたことは十分考えられる。

4. M資金の原資

占領期にGHQは旧日本軍がアジア各地から略奪してきた大量の貴金属や戦時中日本人が供出したダイヤモンド、戦後の混乱期に日本人が隠匿した大量の物資を接収した。略奪物の一部は被害国に返還し、残りの多くは日本が独立した後に日本に返還したとされる。だが、GHQが何をどのくらい接収したか、日本側がどのくらい引き渡したか、これらの記録もないまま、大量の物資の行方が不明になっている。さらにアメリカの援助についても米国の提供額と日本の受取り額との間に開きがあり、日米間の債務返済交渉では最終的には日本が4分の1の債務を支払うことで決着している。消えた物資やその代金が秘密資金の原資になったという噂は、M資金の存在を信じる人々の根拠の一つとなっている。M資金の原資とされるものをいくつか紹介したい。

①接収貴金属

この秋封切られた映画『人類資金』の冒頭シーンは、占領軍が到着する直前に日本軍が大量の金塊を東京・越中島の運河に隠している場面だったが、このシーンは事実に近いものと考えられる。なぜなら、翌46年4月、GHQは同所で大量の貴金属を回収したからである。しかし、何がどのくらい回収されたについては関係者の言い分は食い違っている。この場所に大量の貴金属が隠匿されているという情報をGHQに提供した日本人は、白金1,200本、純金300本のインゴット合計55トンだったとして報償金を要求したが、GHQの検閲が行われていた当時の新聞の記事では6,000万ドル相当の銀塊が発見された、白金1千億円はウヤムヤになっていると報じられた。その後の国会質疑では大蔵省側は銀塊30トンが引き上げられ、オランダ領から略奪したものは返還し、旧陸軍の銀塊は国庫に帰属したと回答している。また、45年10月、GHQが日銀地下金庫にあった貴金属を接収したとき、金は108トンあったとされるが、日本の独立後にアメリカから金102トン、銀2,365トンが返還された。GHQが5年間に日本で接収した金の総額は2億500万ドルだった。その後、消えた白金の代金として金23トンと2億7千万ドルが返還されたが、越中島の大量の金塊はどこかに消えてしまった。後述するガリオア・エロア資金の清算に用いられたとかM資金に変わったとか言われた。

②供出ダイヤモンド

44年、軍需省は兵器製造用工作機械に使うダイヤモンドを、交易営団を通じて民間から買い上げた。ダイヤ買い上げは大都市の百貨店を拠点として、予定よりも期間を延長して12月まで

4ヵ月間行われた。だが、集められた大量のダイヤは、殆ど機械に使われることもなく終戦を迎え、交易財団により保管されていた。45年10月、東京日本橋・三井信託金庫の地下金庫にあった魔法瓶8個に入れられていた大量のダイヤはGHQに接収され、金塊や白金、銀塊などとともに日銀地下金庫に移された。独立回復後、ダイヤの管理は日本側に移され、26万カラットとされたが、66年に政府が払い下げたダイヤは16万1,000カラットであった。営団の正確な買い上げ量は不明であるが、5,60万カラットあったとも言われた。GHQが連合国側に12万8,000カラットを返還したということなので、これを差し引いても3,40万カラット足りないのである。接収ダイヤの他に、右翼の黒幕・兎玉誉士夫が中国で集めてきて戦犯の扱いに手心を加えてもらおうとGHQへ提出した大量のダイヤもあった。だが、日銀地下金庫のダイヤの一部は、確かに消えていた。例えば、金庫の管理責任者であったM大佐はダイヤを持ち出し休暇でアメリカへ帰国するたびに現地で売り捌いていた。大粒ダイヤが多かったことから噂となり、持ち出しが発覚した。彼は帰国してきたとき空港の税関で拘束され500個以上のダイヤは回収された。彼は軍事裁判にかけられ有罪判決を受けた。だが、彼は冤罪で大量の持ち出し犯は別にいるという説もある。また、52年4月、日航機「もく星号」が伊豆大島・三原山に墜落して、乗員・乗客37人全員が死亡したが、唯一の女性乗客の遺体の周囲にダイヤが散らばっていたという。彼女は、当時珍しかった宝石デザイナーで、ダイヤを大量に売り捌いていたが、その出所は日銀地下金庫だと噂された。同機は最初静岡県舞阪沖に不時着し波間に浮かんでいるとGHQから発表されたが、その後行方不明とされた。事故機が墜落現場で発見されるまでの時間にGHQが同機周辺で何らかの工作をしたのではないかという憶測をうんだ。

③ガリオア・エロア資金

47年から52年、戦争で荒廃した被占領国を救済するため、米国が用意した「占領地域統治救済資金（ガリオア資金）」は生活に必要な食糧や衣料、医薬品などを日本に供与し、日本や韓国の産業再生のための「占領地域経済復興基金（エロア資金）」は、鉄鉱石や石油、石炭、ゴムなど工業原材料を供与した。援助物資は、GHQから日本政府に引き渡され、業者に回され、その代金は貿易特別会計と49年以後見返資金特別会計に積み立てられた。最初、日本側はこれらを贈与と考えていたが、54年から日米間で返済交渉が行われた。米は資金の総額を19億5,400万ドルと主張したが、先の2特別会計の合計は17億9,500万ドルで、1億5,900万ドルの開きがあった。この差は、GHQが、あるいは日本政府が、それとも両者が共同で、どこかに大量の物資を隠してしまった結果なのだろうか。さらにその後の返済交渉で、不思議なことが起こっている。62年に日米は西ドイツにならって債務を減額し総額を4億9,000万ドル、15年の返済とすることで合意し、日本の返済は72年に終了した。この債務総額は、米国が最初に主張した額の4分の1である。もともと援助として供与したのでこれだけでも回収すれば米としては十分だとされたという。前出の1.6億ドル弱と供与額と返済額の差である13億から14億ドルが、M資金の原資になったことは十分考えられる。ただ、前述の越中島で引き揚げられて消えた大量の金塊と交換したとすれば、一部辻褄はあう。

④隠匿蔵物資

敗戦直前まで本土決戦を叫んでいた日本軍は、貴金属、食料品、鉄・銅・ゴムなどの戦略物資、衣料品など大量の物資を、軍需工場や軍関係施設に保有していた。ポツダム宣言受諾の直前8月14日の閣議で軍保有物資を放出することが決まったが、その総額だけで約2,400億円だった（ちなみに46年の国家予算は560億円）。それらが敗戦と同時に放出され、政府高官や軍上層部とつながりを持つ一部の者の手によって隠匿されてしまった。8月14日から9月2日までに日本全土の造兵廠や糧秣廠に貯えられていた軍需物資の約70%が不法に処分されていた。回収されたのはこのうちの30～60%で、残りの物資は消えていた。日本政府は46年、隠匿蔵物資緊急措置令を出し、摘発を進め、47年、経済安定本部に隠匿蔵物資特別委員会を設けて、本格的摘発に乗り出し、日銀地下金庫に100億円のダイヤが無登録のまま置かれていたのを発見したこともあった。だが、48年までに摘発されたのは、放出額の1割であった。GHQも民生局と経済科学局が中心となって隠匿物資摘発活動を進めたがはかどらず、何故かC・ウィロビー少将率いる参謀2部（G2）も協力的ではなかった。彼は日本における反共勢力の核心である保守勢力の反発を恐れて摘発活動に協力的ではなかったとされる、しかし、実際は、G2は摘発を進めていた。例えば、46年1月、習志野・流山両陸軍糧秣廠にあった銀の延べ棒2,000本の内600本が千葉市内に隠匿されているのを米軍は摘発接收している。宮城県でも白金を米軍が接收している。信越地方の隠匿金塊もキャノン機関に摘発されている。そして、ウィロビーは隠匿物資を基にウィロビー資金をつくり、つぎの四谷資金を加えて、後のCIA東京支部の工作資金を作ったと言われている。

⑤四谷資金・LS資金・蓄積円

M資金に組み込まれたとされる秘密資金は他にも存在した。一つは四谷資金と呼ばれた。四谷のイエズス会の教会を拠点としていたB神父は、経済・金融・貿易などの統制が厳しかった当時、必要物資の輸入、運輸、加工等の取扱権限をGHQから特権的に与えられていたので、彼の手を通すとこれらの許可が得られた。さらに彼は海外との取引や渡航に必要とされたドルと円の闇取引を手掛けて、これと先の手数料で1,500億円を上回る収入をあげたと言われた。彼はG2系のキャノン機関とつながりがあり、この四谷資金は反共工作資金に使われたという。また、GHQ法務局系統で管理されていた、東京裁判の戦犯容疑者からの押収物や贈答品が原資で闇金融でも運用したとされる、東京裁判のJ・キーナン首席検事に由来するキーナン資金が30数億円あったといわれる。

この他、占領期にハリウッド映画の配給窓口「セントラル・モーション・ピクチャー・エクスチェンジ」や石油メジャーは日本国内で莫大な売上をあげたが、円をドルに替えて持ち出すことができず、円のまま日本国内に蓄積されていた。この蓄積円数百億円はその後土地やビルの購入に用いられたが、大半は闇に消え、M資金に加えられたのではないとも言われた。そして、68年の飛驒3兆円事件では石油メジャーが日本に残した資金が近々解禁されるといわれ、78年、映画俳優Tが騙されたM資金話は、この映画蓄積円から融資されると持ち掛けた。

5. M 資金報道—実在か虚構か

この M 資金に関する最大の謎は、果たしてそれが実在するのか、それとも虚構の作り話なのか、ということである。ただ、仮にそれが存在するとしても M 資金は極秘に融資される資金であるから少数の当事者しか知りえない。一般の人々は、マスメディアの報道を通してのみ M 資金のことを知りうるので、メディアの M 資金報道状況から検討してみよう。

M 資金について実在と虚構、報道についてあるとなし、と分けてみると、以下の 4 ケースに整理できる。

ケースⅠ：M資金は実在 報道あり

ケースⅡ：M資金は実在 報道なし

ケースⅢ：M資金は虚構 報道あり

ケースⅣ：M資金は虚構 報道なし

このうち、報道のないケースⅡとケースⅣについては、M 資金が実在するのか虚構なのか部外者は判断できない。報道のある場合、ケースⅠのように M 資金の存在が確認されればニュースであるし、ケースⅢのように虚構であることが確認されれば、やはりニュース価値はあり、報道に値する。実際の状況を見ると、M 資金が実在するという報道はないが、M 資金は虚構であるという報道はある。例えば、前大蔵次官の T 氏が「まゆつばもの」という記事を、日本経済新聞 68 年 9 月 19 日付け夕刊に寄稿している。「実は大蔵省が極秘に保管している GHQ の金が数千億円（時には数兆円）ある。今は日銀の預金になっている。その金を A 銀行に入れてそこから甲会社に回すようにすれば、何がしかのコミッションなり金利なりが手にはいる。ただしこれは大蔵省でも次官のほかごく少数の人しか知らない話だから、へたに動くところれますよ」というような話が出回っていて、訪ねてくる人たちがいるが、そんなうまい話があるはずはない、と完全に否定していた。また、1980 年代半ば以後流行った国債還付金詐欺の騙しの小道具として使われたのが、額面 500 億円の「還付金残高確認証」だった。この「ニセ国債」は国内で用いられ、その後、韓国、米国、英国等にも流出し、現地の銀行で換金しようとした者が逮捕されている。92 年 3 月 28 日付けの日本経済新聞に、警察庁と大蔵省がこのにせ証書を ICPO に手配したことを伝える「架空国債証書に御用心」という記事が掲載された。現在も財務省のホームページには「還付金残高確認証についてのご注意」があり、「『還付金残高確認証』とは証書上に記された金額の国債還付金の残高の存在を示し、これと同額の国債に引き換えることを大蔵大臣が保障したとする架空の証書です。……財務省（大蔵省）がこの証書を発行したことはないし法律上も存在しないものです」と書かれている。ただこれらは M 資金関係者とされる者の言い分なので、M 資金の実在を信じている人びとの中には、やっぱり秘密の壁があって、真相は明らかにできないのだと受け取る人もいるので、完全な否定とは言えないだろう。

さて、M 資金についての報道は、上の否定報道の例のようにいわゆる M 資金詐欺事件の

ニュースが殆どである。そこで、M 資金融資について成立と不成立 (= 詐欺) という 2 条件を上記の 4 ケースに加えれば、以下の 8 ケースが考えられる。

ケース I a : M 資金は実在	融資成立	報道あり
ケース I b : M 資金は実在	融資不成立	報道あり
ケース II a : M 資金は実在	融資成立	報道なし
ケース II b : M 資金は実在	融資不成立	報道なし
ケース III a : M 資金は虚構	融資成立	報道あり
ケース III b : M 資金は虚構	融資不成立	報道あり
ケース IV a : M 資金は虚構	融資成立	報道なし
ケース IV b : M 資金は虚構	融資不成立	報道なし

M 資金が虚構の場合、融資が成立するケース III a とケース IV a は論理的にありえないので、これらを除外すれば合計 6 ケースが想定可能である。虚構の場合、融資不成立のケース III b とケース IV b がありうる。これらはいわゆる M 資金詐欺である。そのうち報道なしのケース IV b については当事者以外には知りえないことなので、ケース III b とケース IV b のいずれが多いのかは不明である。詐欺にあって被害を蒙っても外聞をはばかって被害届を出さないケースがあると考えられるので、メディアの M 資金詐欺事件報道は起きている M 資金詐欺事件の一部であろう。

M 資金が実在する場合は、I a から II b のすべてのケースが論理的に成立する。ただ、M 資金融資が成功した場合は、当事者が自分の業績にしてしまうとすれば、M 資金融資のことは外部に漏らさないだろう。このケース II a と融資不成立のケース II b とは、報道自体がないので、M 資金が実在していても一般人は知りえないことである。残りのケース I a とケース I b に関する報道があれば、一般人でも M 資金の実在を知りうるのであるが、ケース I a に近いものとして、A 社に M 資金融資を成功させたので B 社に融資話を持ち掛けたという報道はあるが、融資成功が詐欺のための作り話と考えられるので、I a の融資成立報道はないといえる。II b の融資不成立の報道もない。ケース II b とケース I b はともに M 資金詐欺事件であるが、いずれについての報道もないのである。

結局、M 資金について報道されるのはケース III b の M 資金詐欺だけであり、その場合は、M 資金は虚構とされる。M 資金が実在していても実在するという報道はないので、一般人は M 資金の実在を確認できないのである。そこで、M 資金が実在するのかそれとも全くの虚構なのか確認することが出来ない状況がずっと続き、M 資金は戦後史最大の謎とされている。それでも実在することを信じる人々の心理については後述しよう。

6. M 資金詐欺

M 資金詐欺とは、ある秘密機関に秘密の巨額の資金がある。それを特別に融資できるが、そのためには手数料がかかる。それを負担してもらえないか、というのが基本的パターンの巨額

資金融資詐欺である。

ここでは M 資金詐欺の一例として、1990 年代後半に発生した旧マルク債詐欺を紹介したい。それは、第一次世界大戦後の 1923 年、ドイツで大量に発行された 5 千億マルク債券を、小道具とする M 資金話であった。この話は台湾から来たとされるが、このマルク債は、ある宮家が朝鮮の王家に譲渡したものが日本の敗戦後台湾に渡ったとか旧日本軍の財産が蒋介石の手に渡り、現在はその関係団体が管理。ある宮家の保証があれば大蔵省にプールされている資金を元に日本政府が換金することになっているのだという。「100 枚そろえれば東京三菱銀行本店経由で 15 億円に換金されます。1 億円あれば 100 枚集めることができます」とか、「マルク債を千枚単位で集めれば、さる機関が、1 枚 80 万円で買い取ってくれる。すでに手元には相当な数がある。現金化に一口乗らないか」というような出資話が出回った。債券を多数集めると大金に変わるという手口が目新しかった。「マルク債券を 1 万枚、約 5 兆円分を住友銀行に預けてある。もともとは久仁宮様のものだが、債券 1 枚だけでも手に入れば 5 億円になる。だが、入手するには多少の金が必要だ」と言われ、住友銀行副頭取名の偽預かり証を見せられて数千万円出資した者もいた。また、第一家庭電器の N 社長は「スイス銀行の地下に眠っている旧マルク債を買い上げてくれれば、スイス銀行から現行のマルクで巨額の低利融資が受けられる」というブローカーの話を信じて、彼の手形に個人で裏書き保証し共同振出人にもなった。その手形が市中に出回り、同社の信用不安説が流れ、N 社長は引責辞任し、その後同社は倒産した。なお、旧ドイツでは、ハイパーインフレのため 1925 年、旧 1 兆マルクを新 1 マルクに切り替えたので、5 千億マルク債券といっても一部のマニア以外に価値のない紙切れに過ぎなかったし、債券自体も近年に偽造されたものであった。

ところで、20 世紀後半から現在に至るまで M 資金詐欺が続発しているのは何故だろうか。

第一に、M 資金詐欺を巨額資金融資詐欺の総称とすると、資金名にバリエーションがあっても M 資金詐欺と一括されるので、M 資金詐欺事件は止むことはないだろう。実際、21 世紀に入っても、05、06、07 年と M 資金詐欺が発生し、11 年には元横綱 A が 1 億円詐取された事件が発生した。12 年にも元女優 M が M 資金を運用しているとして 200 万円騙し取った容疑で逮捕されている。

第二に、定義上の理由だけでなく、M 資金詐欺は、巧妙な詐欺の代表とされるように、信頼できる紹介者・保証人・見せ金として用いる小道具を用意し、場合によってはチームで役割を分担して行われる手の込んだ詐欺であり、被害者に信じられ易いことが挙げられる。

詐欺師は事業拡大を目指して大きな資金を必要としている企業経営者のもとに有力政治家の紹介で現れ、こんな話を持ちかける。

「ある秘密機関に巨額の秘密資金がプールされていて融資先を探している。この資金は基幹産業育成を目的とするもので、資本金 500 億円以上の東京証券取引所第一部上場企業に資本金の 10 倍までの資金を融資する。資金の返済は 30 年後で金利は市中金利より 1% 低い。対象企業の経営者にしか融資できないのであなたも融資を受けてみませんか。このことは他人に口外したらだめになります。」

多くの経営者はこのような法外な話には警戒して手を出さないが、大手企業であれば何兆円

もの融資が受けられるということで、大金を必要としているが銀行の融資がすすんでいないような企業の経営者が乗ってくる。そして、具体的な話は省庁や大手銀行本店の応接室で進められる。皇室のやんごとないお方や殿様の末裔、財団理事、元事務次官の孫などが出て来たり、残高 100 億円の預金証書を見せたりするので、経営者もすっかり信用してしまう。そして、融資手続きに必要な書類として申し込み念書、名刺、預金通帳、印鑑証明書等を提出させ、印紙代や必要経費などの先払いを求める。5,000 億円融資されるなら 1 億円でも安いものだ。だが、一向に融資は実行されない。支出したお金は返ってこないし、経営者が詐欺だと気付いた時には、自分の書いた書類が金融ブローカーの間に出回っていて回収が困難か不可能であり、会社に迷惑をかけた責任をとって辞任せざるをえなくなる。

詐欺師たちがチームで分業する場合は、つぎのようになるという。まず「仕掛け屋」という男が豊富な M 資金の存在を強調し、この豊富な資金を動かす実力者を装う。つぎに「導入ブローカー」と称する仲買人が登場してきて、実力者の存在を示唆し、話をつなぐためには活動資金が必要だ、と小切手のような金品を要求する。入手した小切手はカラーコピーした後、返却する。(騙された者は実害がないので被害届を出さない。) 末端のブローカーはこの小切手のカラーコピーを小道具にして現金を寸借する仕事に取り掛かる。

なお、新宿、池袋、新橋などの喫茶店にたむろして新たな資金を欲しがっている会社の情報を交換している、末端の「喫茶店ブローカー」、大蔵省や日銀の OB を演技する「OB ブローカー」、経営コンサルタントなどの事務所を構えている「オーナーブローカー」がいて、その上に「融資手続人」、内外の要人 5 人から成る「融資委員会」まで 5 段階のブローカーがいるともいうが、詐欺師たちも融資手続人以上のレベルのブローカーとも会ったことはないという報道もあるので、3 段階のブローカーがいると考えられる。

第三に、M 資金が存在すると信じる人々がいるからである。詐欺という犯罪は、加害者が実行しようと決意すれば実行できる窃盗や強盗のような犯罪と異なり、加害者の意思だけでは成立しない。被害者の同意がなければ成立しないのである。詐欺の被害者は、詐欺師あるいは持ち込まれた話を信用している。仮にある企業の経営者に M 資金を融資するという話が持ち込まれたとしても、これに乗る人がいなければ、詐欺は成立しない。M 資金詐欺の被害者は、M 資金が存在すると信じたから、その話に乗り必要な書類や費用を出したのである。また、79 年末、M 資金詐欺に関係ある詐欺師が 3 万人もいると報道されている。これだけ多数の詐欺師が生活できるのはそれだけお金を巻き上げているということであり、詐欺師の話術が巧みであって、その話が信じられているということの傍証である。詐欺師の間でも M 資金の実在を信じている者がいるので、その話には説得力があるともいう。

M 資金の実在を信じる人々の根拠の一つとされるのが、前述の M 資金の原資の噂である。さらに、GHQ の占領期に M 資金の原型と考えられるアメリカ由来の資金が実際に存在したという事実がある。それは、見返資金という「M 資金」である。49 年から 52 年まで米国から日本に対する援助としてガリオア資金およびエロア資金によって輸入された物資等を日本国内で売り捌いた場合の代金に相当する円資金が、見返資金特別会計に積み立てられ、通貨財政の安定と経済再建のために使用された。それが見返資金である。それは、総額 3,600 億円という巨額

資金で、うち 1,100 億円が国の債務償還および国債買い入れに、1,000 億円が公企業（国鉄、電気通信、日本輸出入銀行、日本開発銀行、住宅金融公庫等）および公共事業に対する投資または支出として用いられた。私企業投資は日銀が担当したが、電力、海運の超重点産業に投下された 1,100 億円を中心として、石炭、鉄鋼、肥料、化学薬品等の基幹産業に対する貸付、金融機関の優先株式の引き受け、中小企業に対する金融資金の放出で 1,400 億円、残りの 100 億円が連合国軍人住宅公社や学校給食などに支出された。この資金の運用または使用に当たっては、経済安定本部が中心となって政府部内の意思をまとめてその計画の大綱を閣議で決定し、さらに GHQ の承認を得て、これに基づいて大蔵省が運用または使用にあたった。なお、見返資金特別会計は、53 年に産業投資特別会計に引き継がれ、産業界の投資資金に回された。この見返資金によって日本経済のインフレは抑えられ、電力、海運等の基幹産業は復興へ向かい、朝鮮戦争特需とあいまって日本経済は成長へ歩みだすことになった。また、見返資金により鉄鋼、自動車、造船といった基幹産業に直接融資を行った日本開発銀行も設立されている。

この見返資金については、資金規模や使途、管理運用等の情報は、公表されているので、秘密資金ではなかったが、GHQ のヒモ付き資金だったため、どの分野に優先的に配分するか、電力会社をどう再編するかなどに GHQ の意向が強く働いた。日米共同管理の資金、大蔵省の金で日銀にある、私企業は基幹産業融資が中心、電力や海運に対する 15 年以上の長期貸付、といった M 資金話によく出てくる要素を持っていた。見返資金が、その後の M 資金話の素材とされて、見返資金の恩恵にあずかれなかった会社の経営者たちに M 資金話は魅力的な話として提示されたと考えられる。

第四に、M 資金については実在か虚構かいずれとも確認されていないことがある。M 資金詐欺の場合は、融資が成立しないから詐欺になるだけである。詐欺師が提示しているのは、「M 資金」が実在し融資できるという話である。この話が真実であって、融資が成立しても本来の M 資金が実在すると証明されたわけではないし、融資が成立しないから、M 資金は存在しないとも言えない。たとえ詐欺師の話が虚構の作り話であったとしても、M 資金は存在しないと断言はできない。M 資金話のどこまでが事実でどこから虚構なのか一般人には不明である。ひょっとしたらあるところに M 資金は実在して自分が融資を受けられるかもしれない。詐欺師はこのような心理に付け込んでいると考えられる。この理由がもっとも大きいかもしれない。一般の人々の M 資金に対する見方を検討する必要があるだろう。

7. M 資金とは何か

最後に、M 資金とは何か考察してみよう。

マルクスとエンゲルスの『共産党宣言』の有名な表現を借りれば、「日本に一つの幽霊が徘徊している—M 資金という幽霊が」、と言えるかもしれない。幽霊は、出没する場所、時間、見る人によって姿を変えるが、M 資金も、姿を変えて出没する。その名は、GHQ の秘密資金に始まり、マッカーサー資金、マーカット資金、メリケン資金、見返資金、ロスチャイルド資金、ユダヤ資金、オイルダラー、CIA 資金、グリーン資金、マルタ騎士団国資金、ブルネイ資金、

香港資金、華僑資金、国債還付金、皇室資金、G7 資金、マルク債資金、ナイジェリア資金、と挙げればきりが無い。いずれも詐欺事件がらみのものであり、詐欺師たちの想像力の豊かさに感心させられる。

それでは、幽霊=M 資金の正体は何か。

まず、巨額融資に直接関係ないはずの日本人の間でも M 資金に対する関心が高いことが注目される。その一つの傍証として、72 年の松本清張の『深層海流』を嚆矢として、福井晴敏の『人類資金』まで、M 資金を主題とする書籍が多く出されていることが挙げられる。この「M 資金もの」のうち、主要なものを出版順に挙げてみよう。

松本清張『深層海流』(72)、平田敬『けものたちの黄金—東京テレビ M 資金事件』(79)、高野孟『M 資金—知られざる地下金融の世界』(80)、安田雅企『追跡・M 資金—東京湾金塊引揚事件』(95)、清水一行『懲りねえ奴—小説 M 資金』(95)、本所次郎『巨額暗黒資金』(2007)、長岡哲生『極秘資金』(08)、高橋五郎『天皇の金塊』(08)、関浩三『日本軍の金塊—馬賊王・小日向白朗の戦後史』(13)、福井晴敏『人類資金』(13)

それでは、なぜ、人々の M 資金に対する関心は高いのであろうか。ここで、大胆な仮説として、M 資金を埋蔵金と仮定してみよう。そうすると、どこかに秘密の巨額資金があって、うまくいけば融資が受けられるという M 資金話は、どこかに埋蔵金があつてうまくいけば発見できるかもしれないという「埋蔵金伝説」と話の構造と内容が同じであることに気が付く。埋蔵金=隠された財宝探しの話は、日本だけでなく世界中で聞かれる、人々に人気がある話である。だから、M 資金話は人気があり、人々の関心も高いと考えられる。

ところで、アメリカにおける埋蔵金伝説に関する民俗学の研究から興味深い知見が得られている。埋蔵金伝説のプロットは単純な構造を持っている。それは、①埋蔵金が隠されている、②埋蔵金が探される、そして、③搜索の結果は、成功か失敗である、というものである。さらに、埋蔵金探しが失敗に終わるケースが多いことが重要な意味を持つという。それは、無限の豊かさ、機会の国というアメリカの民衆の世界観を反映している。人々は、埋蔵金を取り戻せないということを、無限の富が誰に対しても用意されている、伝説を成功で終わらせる機会があると考え。多少の工夫と努力で発掘を試みる誰にでも無限の富が待っている。ところで、伝統的清教徒の価値観からいえば勤勉や競争が好ましく、正直に働くことが成功への近道である。だが、埋蔵金伝説では努力でなく幸運で大金を獲得する。伝統的価値観と矛盾しないのか。そこで、無限の富が存在するとしても暴風雨や守護霊など超自然的な力、仲間の裏切りが人々の勤勉や工夫を上回って埋蔵金発見を妨げるとか、大金は手にした人々を墮落させるとか言われる。こうなると、埋蔵金は努力なしに入手した正しくない悪魔の金であり、避けるべきものとされる。

また、ドミニカ共和国における埋蔵金伝説の研究によれば、埋蔵金伝説は、経済的に底辺部にいる人々が共同体の中で評判をえる儀式として語られるという。埋蔵金伝説は、世代を超えて繰り返し語られる話である。財宝は、彼らの先祖のカリナゴの戦士が旧宗主国スペインの船を攻撃して略奪し陸上に埋蔵した、あるいは攻撃されて沈んだ船から見つけた銀の延べ棒や金

貨である。埋蔵金の発見は植民地支配者に奪われた財宝を取り戻す行為であり、埋蔵金伝説を周囲の他者と共有することは、過去の歴史、抵抗の歴史を共有し、民族の歴史と一体化することである。埋蔵金は歴史を凝縮したものであり、埋蔵金伝説は輝かしい過去の抵抗の歴史を祝賀するものであるとされる。

これらの知見から言えば、M資金は占領期の記憶を凝縮したものであるといえる。また、埋蔵金伝説というのは、どこかに隠されている埋蔵金＝財宝を発見しようとする物語であるが、埋蔵金発見は目的ではないということが分かる。実際に財宝を発見したという話は滅多に聞かれない。日本でも豊臣の埋蔵金も徳川の埋蔵金もいまだに発見されていない。

M資金話が、占領軍に奪われた自分たちの財宝を取り戻す埋蔵金伝説であるとすれば、やはり埋蔵金＝M資金は見つからないであろう。そして、M資金が占領軍の埋蔵金であり、M資金話が埋蔵金伝説というロマンであるかぎり、M資金は人々の記憶の中で生き続ける。だが、その実在を確かめた人はいない。だからM資金は幽霊なのである。

参考文献

- 取違孝昭『騙す人ダマされる人』新潮文庫、1995年
- セオドア・コーエン（大前正臣訳）『日本占領革命 GHQ からの証言 下』TBSブリタニカ、1983年
- 関浩三『日本軍の金塊一馬賊王・小日向白朗の戦後秘録』学研パブリッシング、2013年
- 保坂正康『昭和史七つの謎』講談社、2000年
- 山崎和邦『詐欺師と虚業家の華麗な稼ぎ方一人はこうして騙される』中経出版、2005年
- 小中陽太郎「M資金の真相の真相」『思想の科学』1982年12月
- 室伏哲郎「摩訶不思議なる錬金術 裏資金の誕生ーガリオア・エロア」『朝日ジャーナル』1977年4月1日
- 大島寛一「見返資金の記録と回想」『ファイナンス』1974年1月
- 拙稿「M資金伝説」『青山学院女子短期大学紀要』第52輯、1998年12月
- Gerard T. Hurley, Buried Treasure Tales in America, *Western Folklore*, Vol.10, No.3, 1951, pp.197-216
- Patrick B. Mullen, The Folk Idea of Unlimited Good in American Buried Treasure Legends, *Journal of the Folklore Institute*, Vol.15, No.3, 1978, pp.209-220
- Alan Dundes, Folk Idea as Units of Worldview, *Journal of American Folklore*, Vol.84, No.331, 1971, pp.93-103
- Deidre Rose, Telling Treasure Tales: Commemoration and Consciousness in Dominica, *Journal of American Folklore*, Vol.122, No.484, 2009, pp.127-147
- Chalmers Johnson, The 1955 System and the American Connection: A Bibliographic Introduction, *JRRI Working Paper*, No.11, July 1995, Japan Policy Research Institute
- Norbert A. Schlei, Japan's "M-Fund" Memorandum, January 7, 1991, *ibid.*
- 「『100枚集めると15億円!』巨額マルク債の謎」『サンデー毎日』1999年11月21日
- 「第一家電社社長を引責辞任させた旧マルク債による架空融資話」『実業界』1998年6月
- 「『GHQの清算人』を名乗る男の正体」『月刊TIMES』2008年5月
- 「ニッポン・闇金融の主役『M資金』資金繰り悪い企業狙い再び暗躍」『エコノミスト』1996年8月27日
- 「多発する『M資金』話の持ち込み」『New Finance』2004年2月
- 「米国援助と見返資金」『ファイナンス』1993年7月

Japan's M-Fund Legend Reconsidered

WATANABE Yoshitomo

In this paper Japan's M-Fund legend and the so-called M-Fund fraud are considered. In Japan many mysterious fraud crimes have taken place since the 1970s. The swindlers introduce to some corporate manager marvelous financial plots. They propose that if he will pay a small amount of money, they can lend some billion yen from the M-Fund at low interest for long term. He accepts the offer and pays some fees but he cannot obtain the fund. What is the M-Fund? It is said that when Japan was occupied by the Allied Forces after World War II the occupied forces founded a secret M-fund by confiscating precious metals and jewelry and underground money. It is said that the fund had either grown to more than \$ 500 billion by 1991 or become empty by America's enormous expenditure on the Vietnam War. And as to the presence of the M-Fund, nobody confirms it, but nobody confirms its absence. The swindlers capitalize on this ambivalent state. The M-Fund is kept somewhere and you can get it. But no one has been able to get it. I think that the story of the M-Fund fraud is similar to that of the buried treasure legends heard in many countries. And in these legends treasures are rarely found by treasure hunters. But treasures are living in people's memory and waiting to be found. The Japan M-Fund is a hidden treasure living in the memory of the Japanese. Inasmuch as the M-Fund legend is a treasure hunting legend, the treasures will be never found in any case.

Keywords : M-Fund, Legend, Fraud, Japan's occupied history, GHQ, Buried treasure legends
